

日本健康心理学会メールマガジン No.7



2013年2月22日 第7号

Contents

- 1) 学会からのお知らせ
- 2) 健康心理学コラムvol.4 在外研究者特集
 - 2-1) 久留米大学 津田 彰先生
 - 2-2) 同志社大学 杉若弘子先生

1) 学会からのお知らせ

<http://jahp.world.cocacn.jp/jahp/index.html>

■認定事務局（健康心理士関連業務）のお問い合わせ先を更新しました（2013.2.1）

<http://jahp.wdc-jp.com/contact/contact1.html>

■国際的活動のページを更新しました（2013.2.1）

<http://jahp.wdc-jp.com/about/main8.html>

■委員会ページが更新されました

・国際委員会（第27回ヨーロッパ健康心理学会の開催予定）

<http://jahp-international.blogspot.jp/>

・英文誌検討WG（第3回議事録）

<http://international-wg.blogspot.jp/>

■「第27回ヨーロッパ健康心理学会」のご紹介（国際委員会より）
27th Conference of the European Health Psychology Society
が

2013年7月16日～20日に、フランスのボルドーで開催されます。

<http://www.ehps2013-bordeaux.com/>

今年の大会テーマは“Well-being, Quality of Life and Caregiving”です。

ボルドー・ワインで世界的にも有名なボルドーでの開催です。

ご参加いただければ幸いです。

2) 健康心理学コラムvol.4 在外研究者特集

今回の健康心理学コラムは、現在在外研究中であるお二人の先生にコラムをお寄せいただきました。

2-1) 健康行動と固有文化的 (Indigenous and Cultural) 視点
久留米大学文学部心理学科 津田 彰先生

インドネシア、ジャワ島スラバヤのUniversitas Ciputraに研究休暇中です。
経済発展著しい東南アジアの国らしく、街はじつに活気を呈しています。

それは、モーターバイクと車の多さ、無秩序としか思えないような交通道路状況に象徴されています。健康行動の視点からは、ハイリスクな運転行動です。

相乗りバイクが、混雑して車がひしめいているわずかな隙間を右や左へと、ウィンカーはおろか速度も落とさずすり抜けていきます。車もまた同様に、私にとっては、無理な追い越し、追い抜きとしか考えられないのですが、加速しながら、わずかなスペースを見つけて、前の車に急接近しては、左に右に路線変更し、バイクを巧みによけながら実にうまく進んでいきます。

このようなカオス的な交通事情の中で、交通事故はほとんど起こっていません。

実際、こちらに来て1.5カ月過ぎましたが、交通事故はおろか事故検分にも遭遇したことはありません。

こちらの先生に、「こんな交通事情の中、よく事故が起きないね」と尋ねると、

「ここはインドネシアだから」という答えで終わりです。彼らにとっては、この運転行動が当然で、運転とはこんなもんだという受け容れです。

つまりインドネシア固有の運転行動の文化では、このペースで運転することが大事で、そのペースを乱すような、私たちが安全で普通だと考える運転行動こそが、非常識な危険な行動になってしまうわけです。

異文化接触において、その土地の風土とそこで暮らす人々の日常生活のペースと慣習にあわせていくことが適応の鍵とよくいわれます。

実存とも言うべき日々の生きざまは、まさしく心と身体と社会の中の行動（ライフスタイル）に反映されています。

この固有文化的視点から健康とウェルビーイング（幸福）を考えると、欧米のポジティブ心理学の追試に躍起になっている我が国の健康心理学的研究を固有文化的視点から見直す必要があるのではと感じざるをえません。

2-2) 関係性の構築にみる違和感：それは文化差か個人差か
同志社大学心理学部 杉若弘子先生

在外研究の機会を頂き、米国シアトルにあるUniversity of WashingtonのKohlenberg教授の研究室でお世話になっています。スキナーに始まる行動分析の枠組みで、成人の不安障害、気分障害、人格障害などの外来治療に取り組む臨床行動分析、なかでも教授らによって開発された

「機能分析心理療法（FAP：Functional Analytic Psychotherapy）」の
実践と研究に注力する研究室です。

FAPでは、クライアントの日常場面で問題になっている行動がクライアントと治療者の関係においても生じることがある点に注目し、ここに直接働きかけることで治療効果を高めます。それゆえ、行動主義にもとづく心理療法の中では異色ともいえるほどクライアントー治療者関係を重視します。

そして、治療法の効果検証やアナログ研究ではもちろんのこと、実践家のトレーニングにおいても相互の自己開示を基盤とする関係性の構築に重きを置きます。これが実は、日本的な感覚からすると少なからぬ限界越えを求められる内容なのですが、トレーニングを始めたばかりの臨床系の学生はもとより、実験室で初めて詳細を知らされる参加者でさえも、求められる自己開示に抵抗を示すことはまずありません。

語学力を含む個人差の影響を差し引いても、なお残るであろう違和感。この違和感の中で、改めて心理療法、あるいは適応と文化的背景の関係について考えています。違和感は無理に取り除くことなく、FAPのさらなる本質に迫ってみたいと思っています。